

英語史におけるコントロール不定詞の発達について

田 中 智 之

1. 序

Los (2005) によれば、to 不定詞の起源は前置詞としての to が派生名詞を補部を取る構造であり、その元来の機能は目的を表す付加詞であった。その後、不定詞が名詞的範疇から動詞的範疇へと変化し、to 不定詞が仮定法の that 節と同様の機能を持つようになった結果、古英語までに to 不定詞は付加詞だけでなく、動詞のコントロール補部として用いられるようになった。以下はいずれも古英語からの引用であるが、(1) は主語コントロール、(2) は目的語コントロールの例である。¹

- (1) Herodes secð þæt cild to forspillenne
 Herod seeks that child to destroy
 'Herod seeks to destroy the child' (Mt (WSCp) 2.13 / Los (2005: 74))
- (2) ða ðincg ðe ic bebeode eow to gehealdenne
 those things that I order you to hold
 'those things that I order you to hold' (ÆCHom II, 21 181.47 / *ibid.* : 54)

コントロール不定詞は古英語から現代英語まで存在しているため、中英語に出現した例外的格標示構文等と比べると、その歴史的発達について詳しく論じた研究が少ないのが現状である。

コントロール不定詞の歴史的発達を扱った最近の研究である Los (2005) は、英語史を通じてその範疇が CP であるとし、古英語において動詞の接頭辞であった to が中英語において機能範疇 T の位置を占める自由形態素へと変化したことにより、コントロール不定詞を含むいくつかの構文が出現したと主張している。これに対して、田中 (2013) は Los の分析を批判的に検討し、英語史において to が動詞の接頭辞、すなわち拘束形態素であった時期は存在せず、to の歴史的発達には前置詞から機能範疇への変化という典型的な文法化 (grammaticalization) の事例であるとし、to の文法化をそれが持つ素性の変化として特徴付けることを提案している。さらに、4 節で詳しく論じるように、コントロール不定詞が機能範疇 T と C を持つことを示す証拠は 14 世紀に見られるようになったので、その範疇に関する Los の見解にも問題がある。

本論文では、田中 (2013) の基本方針を踏襲し、不定詞標識 to が前置詞から機能範疇へと変化する過程において、to の素性と to 不定詞の構造が変化したと分析することにより、コン

トロール不定詞の歴史的発達を説明することを目標とする。

2. 不定詞形態素の分布と役割

よく知られているように、古英語と中英語には動詞が不定詞であることを示す形態素、すなわち不定詞形態素が存在していた。Jarad (1997), Tanaka (2007) 等の研究において、不定詞標識 *to* の素性変化、および *to* 不定詞の構造変化において、不定詞形態素が重要な役割を果たしたと主張されているので、本節では英語史における不定詞形態素の分布と役割について考察し、3節以降におけるコントロール不定詞の歴史的発達に関する議論の基盤を築くこととする。

1節で述べたように、Los (2005) によれば、*to* 不定詞の起源は前置詞 *to* が派生名詞を補部取る構造である。(3) は古英語以前の *to* 不定詞の形式であるが、ここでは動詞語幹 *ber-* に派生接辞 *-*anja-* が付加されて名詞化され、その派生名詞に与格単数の屈折接辞 *-*i-* が付加されている。

- (3) *to* (preposition) + *ber-* (verb stem) + *-*anja-* (derivational suffix) + *-*i-* (dat sg inflection)
(Los (2005: 156))

*-*anja-* は派生接辞であるために、付加できる動詞の種類が限られていたが、その他の名詞化接辞との競合に勝利し、次第にすべての動詞に付加できるようになった。そして、付加できる語幹の種類に制限がないというのは屈折接辞の特性であるため、*-*anja-* は派生接辞から屈折接辞へと変化し、屈折接辞は語幹の範疇を変えないため、この変化により不定詞は名詞的範疇から動詞的範疇へと変化した。

このように、不定詞形態素は名詞化の派生接辞と名詞に付加された屈折接辞に由来するが、屈折の水平化により、古英語には原形不定詞に現れる主格・対格形の *-an*、および *to* 不定詞に現れる与格形の *-enne* のみが残っていた。その後、初期中英語において不定詞形態素の与格形が消失すると、不定詞の種類に関わらず *-en* または *-e* という形になり、後期中英語にはさらに衰退して形態の具現化が随意的となり、最終的には16世紀中に消失した。

- (4) OE: *-an* (nominative/accusative; with bare infinitive), *-enne* (dative; with *to*-infinitive)
EME: *-en* / *-e* (with both bare infinitive and *to*-infinitive)
LME: *-e* / \emptyset (with both bare infinitive and *to*-infinitive)
ModE ~: \emptyset (with both bare infinitive and *to*-infinitive)

Tanaka (2007) は不定詞形態素の役割に注目し、不定詞の歴史的発達、特に語彙的主語の出現について論じている。その手掛かりとなるのが古英語と中英語に見られる(5)のような構文であり、ここでは使役動詞の原形不定詞補部に語彙的主語が現れておらず、不定詞主語の解釈は恣意的であるか、文脈から復元可能な指示対象となる。

(5) he let halgian bet mynster

he let hallow the minster

'he let __ hallow the minster'

(O.E. Chron. an. 1094 / Visser (1969: 1356))

不定詞形態素が存在する言語においてのみこのような構文が許されるとする Guasti (1990) の観察に基づいて、(6) に示されるように、Tanaka は不定詞形態素が格素性とファイ素性をもち、格素性が認可される場合、そしてその場合にのみ項として機能すると仮定している。この仮定は、Baker, Johnson, and Roberts (1989) における受動形態素は項であるという仮説を拡張したものであるが、不定詞形態素が格とファイ素性に関して屈折する接辞を起源として持ち、不定詞の名詞的特性を担っていたことから支持される。

(6) The infinitival morpheme bears Case and ϕ -features and functions as an argument iff its Case feature is licensed. (cf. Tanaka (2007: 48))

この仮定により、古英語と中英語において(5)のような構文が許されていたという事実が説明される。その構造を示した(7)では、斜体の不定詞形態素が主節動詞により対格を付与され、(6)に従って原形不定詞の外項として機能する。したがって、原形不定詞の外項として語彙的主語が現れる必要はない。

(7) [_{VP} he [_V let-v [_{VP} t_V [_{VP} halgian-v [_{VP} t_V bet mynster]]]]]

Visser (1969), Guasti (1990) 等によれば、(5)のような構文は一部のイディオムを除いて16世紀に消失したが、これは(4)で見た不定詞形態素の消失時期と一致する。この相関関係は、16世紀に不定詞形態素が消失した結果、(7)のような派生が不可能となったので、原形不定詞の外項として語彙的主語が義務的に現れるようになったと説明される。

3. コントロール不定詞の構造変化

本節では、不定詞形態素の分布と役割に注目することにより、不定詞標識 to の素性がどのように変化したのかを明らかにし、時代ごとのコントロール不定詞の構造を提案する。

3.1. 古英語

古英語における to 不定詞が前置詞としての to を主要部とする PP であったと仮定すべき2つの証拠がある。第一に、2節で見たように、不定詞形態素は名詞化の派生接辞と名詞に付加された屈折接辞に由来するが、古英語においても与格形 -enne が残っていたので、to が前置詞として後続する不定詞に格付与していたと考えられる。第二に、古英語において to 不定詞と PP が等位接続されている(8)のような例が観察される。同一範疇に属する構成素のみが等位接続できるとする標準的な仮定に従えば、このような例は to 不定詞の範疇が PP であったことを支持する。

- (8) ut eode [to his gebede] oððe [to leornianne mid his geferum]
 out went to his prayer or to study with his comrades
 'he went out to give his prayer or to study with his comrades'

(Bede 162.7 / Jarad (1997: 51))

次に、to 不定詞の内部構造に目を向けると、節を構成する機能範疇 T と C が存在することを示す証拠は古英語には見られない。上で述べたように、古英語までに不定詞は動詞的範疇へと変化したが、(1) のように to 不定詞が対格目的語を取ることができたことを踏まえて、古英語における to 不定詞の構造は、格素性 [dative] を持つ前置詞 to が vP を補部に取り構造であったと仮定する。以下では、不定詞形態素を INF と表示し、to の範疇と形式素性を括弧内に述べることとする。²

- (9) OE

[_{PP} to [_{VP} V-INF (case, φ) [_{VP} t_V ...]]] (to = P [dative])

(9) では、to が v の位置を占める不定詞形態素に与格を付与するので、(6) の条件に従って不定詞形態素が外項として機能する。したがって、古英語における to 不定詞は機能範疇 T と C を欠いているため、空主語 PRO を認可することはできないが（以下の議論参照）、不定詞形態素を外項とするコントロール不定詞として用いられていたのである。

3.2. 初期中英語

初期中英語になると、(4) で見たように、不定詞形態素の主格・対格と与格の区別が消失し、不定詞の種類に関わらず -en/-e という形に水平化された。これは前置詞の格付与方式の変化と関係があり、Kemenade (1987), Allen (1995) によれば、初期中英語に前置詞は内在格ではなく構造格を付与するようになった。ここでは、同じ変化が不定詞標識 to にも生じ、to の格素性が [dative] から [objective] へと変化し、それが不定詞形態素の水平化として顕現化したと仮定する。to 不定詞の内部構造については、初期中英語においても機能範疇 T と C の出現を示す現象は存在しない。Fischer (1992) によれば、初期中英語に完了不定詞が用いられるようになったが、出現当初の例は実現されなかった出来事を表すものが大部分であり、主節述語よりも前に起こった出来事を表す、すなわち主節とは異なる時制解釈を持つ完了不定詞は、14世紀以降に生産的となった。したがって、初期中英語における to 不定詞の構造は、to の格素性を除けば古英語と同じであったと考えられる。古英語の場合と同様に、(10) は不定詞形態素が to による格付与の下で外項として機能するコントロール不定詞の構造となる。³

- (10) EME

[_{PP} to [_{VP} V-INF (case, φ) [_{VP} t_V ...]]] (to = P [objective])

3.3. 後期中英語

後期中英語になると不定詞形態素がさらに衰退し、-e という形で現れる、あるいは形態的に具現化されないこともあった。不定詞形態素はもともと前置詞 *to* により認可される不定詞の名詞的特性であるので、この時期にその認可に関わる *to* の格素性が失われ始め、*to* による格付与が随意的になったと仮定する。これは *to* が前置詞から機能範疇へと変化し始めたことを意味するが、3.2節で述べたように、14世紀に主節とは異なる時制解釈を持つ完了不定詞が生産的になったので、*to* 不定詞に機能範疇 T が導入された証拠として見なすことができる。さらに、4.1節で論じるように、同時期に *to* 不定詞に機能範疇 C が出現したことを示す現象が観察されるようになったので、*to* 不定詞は従来の構造に加えて、機能範疇 T と C を含む構造を持つようになったと考えられる。(11b) に示される新たな構造では、暫定的に *to* が T の位置を占めると仮定しているが、4.2節において *to* が C の位置を占める可能性を示唆し、(11) を修正することになるので注意されたい。⁴

(11) LME (a preliminary version)

a. [_{PP} *to* [_{VP} V-INF (case, ϕ) [_{VP} *tv* ...]]] (*to* = P [objective])

b. [_{CP} C [_{TP} PRO [_{T'} *to* [_{VP} *t*_{PRO} [_{V'} V [_{VP} *tv* ...]]]]]] (*to* = T [null] [EPP])

(11a) に関する説明は (10) と同じなので省略し、ここでは (11b) の構造に注目する。この構造において *to* は前置詞ではなく機能範疇 T であり、かつ不定詞形態素が存在しないので、*to* による格付与の下で不定詞形態素が外項として機能することはない。Chomsky and Lasnik (1993), Bošković (1997), Martin (2001) 等の極小主義理論における標準的仮説によれば、空主語 PRO は非定形の T からゼロ格 (null Case) を付与されることにより認可される。この仮説に従って、後期中英語において *to* 不定詞にゼロ格を付与する T が導入された結果、不定詞主語として PRO が出現したと主張する。以上の議論が正しければ、[Spec, vP] に基底生成された外項としての PRO が T によりゼロ格を付与され、T の EPP 素性を満たすために [Spec, TP] に移動することにより、コントロール不定詞が派生されると分析される。(ただし、4.1節の議論において、最近の極小主義理論の観点からゼロ格の付与について再考し、PRO の認可には T だけでなく C も関与するという修正案を提示する。)

3.4. 近代英語以降

不定詞形態素は16世紀に消失したが、これにより不定詞は完全に名詞的特性を失った。それに伴い、もともと不定詞の名詞的特性を認可していた前置詞としての *to* の格素性も消失したと考えられる。したがって、*to* は16世紀に機能範疇としての位置付けを確立し、コントロール不定詞は (11b) の構造のみを持つようになった。(3.3節の議論において、(11b) の構造が4.2節で修正されると述べたが、これは後期中英語のみに関するものであり、近代英語以降は (12) の構造に一本化されたとする主張は変わらない。)

(12) ModE~

[_{CP} C [_{TP} PRO [_{T'} to [_{VP} t_{PRO} [_{V'} V [_{VP} t_V ...]]]]]] (to = T [null] [EPP])

4. 後期中英語から近代英語への変化：更なる考察

以上の議論において、主に不定詞形態素の分布と役割に注目して、不定詞標識 *to* の素性変化と *to* 不定詞の構造変化について考察してきた。本節では、後期中英語においてコントロール不定詞が機能範疇 T と C を持つようになったことを示す独立の証拠として、14世紀にコントロール不定詞を含むいくつかの構文が出現したことを論じる。さらに、否定辞を伴う *to* 不定詞の歴史的発達に関するデータに基づき、後期中英語から16世紀にかけて *to* が T と C いずれの位置にも生起可能であったとする新たな分析を提案し、後期中英語におけるコントロール不定詞の構造、および後期中英語から近代英語に至るコントロール不定詞の発達過程を修正することを試みる。

4.1. 機能範疇 T と C の導入

Gelderen (1993) は、分離不定詞 (split infinitive) と代不定詞 (pro-infinitive) の出現に基づき、14世紀に *to* 不定詞が機能範疇 T を持つようになったと主張している。まず、分離不定詞とは *to* と不定詞の間に副詞や否定辞等の要素が介在する構文である。

- (13) a. þe stomak comeþ feble and losyþ his strengthe to *fully*
 the stomach becomes feeble and loses his strength to fully
 sethe þe mete
 seethe the meat (c1400 tr. Secreta Secret. 71, 36 / Visser (1966: 1041))
- b. Y say to þou, to *nat* swere on al manere,
 I say to you to not swear on all manners
 (Wyclif, Matthew 5, 34 / Gelderen (1993: 41))

以下に示されるように、前置詞とそれが格付与する DP の間に副詞等が介在することはできないので、前置詞による格付与には隣接性条件 (adjacency condition) が課せられると仮定する。これが正しいとすると、(9) と (10) の構造では、前置詞としての *to* が不定詞形態素に格付与するので、*to* と不定詞が隣接しなければならない、古英語と初期中英語において分離不定詞が許されなかったことが説明される。一方、14世紀に分離不定詞が見られるようになったという事実は、*to* が前置詞から機能範疇 T へと変化し、目的格を付与しなくなったことを意味する。⁵

- (14) a. *John spoke to *angrily* Mary.
 b. *With *obviously* Emil afraid of snakes, ... (b: McCawley (1983: 279))
- 次に、代不定詞とは *to* に後続する vP が省略される構文である。

- (15) a. But wyllle 3e alle foure do A þyng þat y prey 3ow *to*
 but will you all four do a thing that I ask you to
 (1303 Brunne, Handl. Synne 8021 / Visser (1966: 1062))
- b. But take ensaupmill of 3ewe? & have no cause *to*
 but take example of you have no cause to
 (The Tale of Beryn 2860 / Gelderen (1993: 61))

Bošković (1997), Martin (2001) は、現代英語において代不定詞が例外的格標示構文では許されないのに対し、コントロール不定詞では許されるという事実に基づき、代不定詞の可能性を PRO の認可と関連付けて説明している。指定部・主要部一致を結ぶことのできる機能範疇の補部のみが削除可能であるとする Lobeck (1990) 等の仮説を採用し、代不定詞、すなわち vP の削除は、指定部・主要部一致の下で PRO のゼロ格を照合するコントロール不定詞の T によって認可されるが、ゼロ格を照合しない例外的格標示構文の T によっては認可されないと分析している。

- (16) a. *John believes Mary to know French, and Peter believes Jane *to*.
 b. John was not sure he could leave, but he tried *to*. (Bošković (1997: 12))

これが正しいとすると、14世紀に代不定詞が出現したという事実は、*to* がゼロ格を照合する機能範疇 T へと変化したことを示しており、その結果として空主語 PRO が導入されたということになる。

一方、Chomsky (2008) 等の最近の極小主義理論においては、指定部・主要部関係が破棄され、格照合はフェイズ主要部からの素性継承 (feature inheritance) に基づく Agree の下で行われるので、上記のゼロ格の照合、および代不定詞の分析を修正する必要がある。素性継承を用いた分析では、主語の場合にはフェイズ主要部 C から T にファイ素性が継承され、T との Agree の下で格照合が行われる。したがって、コントロール不定詞におけるゼロ格の照合には、T だけでなく C の存在も必要である。さらに、(17) に述べるように、Emoto (2007) は vP の削除が C から T へ継承された silence 素性により認可されると仮定することにより、CP が投射されるコントロール不定詞においてのみ代不定詞が許されることを説明している。

(17) vP-deletion is triggered by the silence feature of C inherited to T. (cf. Emoto (2007))
 以上の議論が正しければ、14世紀にコントロール不定詞に機能範疇 T と C が導入された結果、C から T へのファイ素性の継承により PRO のゼロ格が照合され、また silence 素性の継承の下で代不定詞が許されるようになったというように、T と C の出現という観点から PRO の認可と代不定詞の可能性を関連付けることができる。

さらに、14世紀にコントロール不定詞が CP 投射を持つようになったことを示す証拠として、この時期に *to* 不定詞に *wh* 句が生じるようになり、新たに3つの構文が出現したという事実が挙げられる。第一に、Visser (1966) のデータから判断すると、*to* 不定詞を用いた間接

疑問文は1300年頃から観察されるようになった。以下は提示されている最も古い例である。

(18) Heo nuste wyder to fle

she knew not whether to fly (c1297 Rob. Glouc. Chron. 937 / Visser (1966: 977))

The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second Edition (Kroch and Taylor (2000); 以下 PPCME2)、および The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (Kroch, Santorini, and Delfs (2005); 以下 PPCEME)⁶を用いた調査からも同様の結論が支持され、to不定詞を用いた間接疑問文の初出は1340年頃に書かれたテキストからの例であり、それを含めて中英語には21例、初期近代英語には227例が見つかった。初期近代英語における用例の急増は、16世紀にコントロール不定詞の構造が機能範疇を含む構造に一本化され、CP投射が確立されたとする3.4節の見解とも一致する。

第二に、PPCME2, PPCEMEを用いた調査により、to不定詞を用いた自由関係節が同時期に出現したことが観察される。以下は1388年頃に書かれたテキストからの初出例であり、それを含めて中英語には7例、初期近代英語には12例が見つかった。

(19) The woman seith to him, Sire, thou hast not *where ynne* to drawe,

the woman says to him sir you have not where in to draw

(CMNTEST,IV,1.261 / M3)

第三に、同様の結論はwh句を伴う不定詞関係節に関する調査からも支持される。不定詞関係節自体は古英語から存在するが、PPCME2, PPCEMEを用いた調査により、顕在的なwh句が現れるようになったのは14世紀以降であることが分かった。以下は1390年頃に書かれたテキストからの初出例であり、それを含めて中英語には3例、初期近代英語には4例が見つかった。

(20) þou has inouȝ *wherof* to speken,

you have enough whereof to speak

(CMEDVERN,254.602 / M3)

これら3つの構文の出現は、14世紀にコントロール不定詞に機能範疇Cが導入され、その指定部にwh句が移動するようになったことを示しており、本論文が提案するto不定詞の構造変化を支持するものである。⁷

4.2. to不定詞における否定辞の分布

以上の議論から、コントロール不定詞が14世紀に機能範疇TとCを持つようになったことが明らかとなったが、2つの機能範疇が導入された結果、不定詞標識toがどちらの位置に現れるのかという疑問が生じる。(11b)の構造では暫定的にtoがTの位置を占めると仮定したが、本節では、to不定詞における否定辞の分布に基づき、toがTとCいずれの位置にも生起可能であったことを提案する。したがって、後期中英語におけるコントロール不定詞の構造は以下のように修正される。

(21) LME (a final version)

- a. [_{PP} to [_{VP} V-INF (case, \emptyset) [_{VP} t_V ...]]] (*to* = P [objective])
 b. [_{CP} C [_{TP} PRO [_{T'} to [_{VP} t_{PRO} [_{V'} V [_{VP} t_V ...]]]]]] (*to* = T [null] [EPP])
 c. [_{CP} to [_{TP} PRO [_{T'} T [_{VP} t_{PRO} [_{V'} V [_{VP} t_V ...]]]]]] (*to* = C; T [null] [EPP])

4.2.1. 基本的事実

現代英語において *to* 不定詞を否定する場合、否定辞 *not* を *to* の前に置くのが普通であるが、*not* が *to* と動詞の間に現れる語順も可能である。

- (22) a. John wants {not to / to not} go.
 b. Peter expects his friends {not to / to not} object to his proposals.

(cf. Pollock (1989: 375))

これに対して、否定辞を伴う *to* 不定詞の歴史的発達に関する事実関係は必ずしも明らかではないので、数少ない先行研究で提示されているデータ、および歴史コーパスから得られたデータに基づき、各時代の *to* 不定詞における否定辞の分布を明らかにすることから始める。

まず、Han (2000) は The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, First Edition (Kroch and Taylor (1994); 以下 PPCME1) を用いた調査により、後期中英語において *not* が *to* 不定詞を否定する場合、(23a) のように *not* が *to* に先行する語順 (以下 *not-to-V* 語順) と、(23b) のように *not* が *to* および動詞に後続する語順 (以下 *to-V-not* 語順) の両方が可能であったことを観察している。そして、M(ood) の位置を占める *to* の上位と下位に NegP (*not* = Neg) があるとし、前者の語順は上位の NegP を含む一方、後者の語順は動詞が下位の Neg を越えて、Mよりも低い位置にある Asp(ect) へ移動することにより派生されると主張している。

- (23) a. sche wuld vwche-save *nouth* to labowre azens 3w jn þis
 she would promise not to labour against you in this
 matere tyl 3e kom hom
 matter until you come home (Paston Letters 221.310 / Han (2000: 282))
 b. monye men vsom wel to come *not* in bedde wiþ schetis,
 many men are-accustomed well to come not in bed with sheets
 but be hulude aboue þe bed
 but be covered above the bed (Wycliffite Sermons I, 479.641 / *ibid.*)

また、Miyashita (2001) は PPCME1 および OED の引用文検索機能を用いた調査により、*not-to-V* 語順と *to-V-not* 語順に加えて、(24) のような *not* が *to* と動詞の間に現れる語順 (以下 *to-not-V* 語順) が中英語と初期近代英語において可能であったこと、および *to-V-not* 語順が16世紀に消失したことを指摘している。そして、T の位置を占める *to* の上位と下位に

NegP (not = NegP 指定部) があるとし、not-to-V 語順は上位の NegP を含む一方、T と下位の NegP の間にある Inf(itive) への動詞移動が随意的であったと仮定することにより、to-V-not 語順と to-not-V 語順が派生されると主張している。

- (24) It is good for to *not* ete fleisch, and for to *not* drynke win
 it is good for to not eat flesh and for to not drink wine

(1382 Wyclif Rom. xiv. 2 / Miyashita (2001: 133))

これらの先行研究の事実観察を検証し、否定辞を伴う to 不定詞の歴史的変遷の全体像を明らかにするために、PPCME2, PPCEME、および The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (Taylor, Warner, Pintzuk, and Beths (2003); 以下 YCOE) 用いて調査を行った。⁸その際、古英語については na, nealles とその異形、中英語と初期近代英語については not とその異形を伴う to 不定詞を対象とし、(少数ながら見られる) 典型的には定形動詞の直前に現れる否定辞 ne を伴う例は除外した。また、中英語において頻繁に観察される、(24) のような for to 不定詞の例も to 不定詞に含めることとした。その調査結果は (25) に示される。括弧内の数値は等位構造の第二等位項において to が省略されている例を内数で示しており、そのような例は表面上 not-V または V-not という語順になる。後者を to-V-not 語順に含めるのは問題ないと思われるが、前者を not-to-V 語順、to-not-V 語順のどちらに含めるのかは難しい判断であるが、ここではコーパスのタグ付けに従い分類した。

- (25) to 不定詞における否定辞の分布 (YCOE, PPCME2, PPCEME に基づく)

	EOE	LOE	M1	M2	M3	M4	E1	E2	E3
not-to-V	3	4	6	2	28(6)	19(1)	48	107(1)	119(4)
to-not-V	0	0	0	0	0	0	0	0	2(2)
to-V-not	0	0	0	0	16(8)	10(2)	2(1)	2	0

この調査結果から、古英語と初期中英語は用例数が少ないものの、not-to-V 語順 (古英語では na, nealles とその異形を伴う) は英語史を通じて観察されることが分かる。また、Han (2000) が指摘するように、to-V-not 語順は後期中英語に出現した。E2 における 2 例はそれぞれ 1571 年と 1593 年に書かれたテキストからのものであり、to-V-not 語順が 16 世紀に消失したとする Miyashita (2001) の見解と一致する。一方、今回の調査では to-not-V 語順が E3 の 2 例のみしか発見されず、しかも括弧で示されるように、いずれの例も等位構造において to が省略されているので、実際に to-not-V 語順の例であるかどうかは不明である。しかし、(13b) で見たように、Visser (1966), Gelderen (1993) によれば、14 世紀以降 to と不定詞の間に not が介在する分離不定詞の例が観察されるので、to-not-V 語順は後期中英語に出現したと仮定する。

4.2.2. 分析

4.2.1節の議論から明らかとなった否定辞を伴う to 不定詞の歴史的変遷について、本論文で提案した to 不定詞の構造変化の観点から説明を試みる。まず、(9), (10) で見たように、古英語と初期中英語における to 不定詞は節を構成する機能範疇を欠いていたので、そこに生じる否定辞は構成素否定 (constituent negation) の機能を果たしていた。以下の古英語の例を見ると、否定辞が to に先行する副詞よりも前に現れているので、それは vP/VP に付加されているのではなく、to 不定詞全体、すなわち PP に付加されていると分析される。(vP への付加が許されないことについては、4.1節を参照のこと。)

(26) Forðæm is sio tunge gemetlice to midliganne, *nales* ungemetlice to
therefore is the tongue moderately to bridle, not immoderately to
gebindanne
bind

'therefore, the tongue is to be moderately bridled, not to be bound immoderately'

(cocura, CP: 38.275.10.1786 / O2)

したがって、古英語と初期中英語における否定辞を伴う to 不定詞の構造は以下のようになるが、構成素否定を表す否定辞は副詞であり、NegP は投射されていない。否定辞はその作用域である構成素、すなわち PP に付加されるので、古英語と初期中英語において not-to-V 語順のみが可能であったという事実が説明される。

(27) OE, EME

[_{PP} [_{Adv} not] [_{PP} to [_{vP} V-INF (case, φ) [_{VP} t_V ...]]]]

その後、後期中英語になると、to 不定詞は従来の構造に加えて、機能範疇 T と C を含む構造を持つようになった。to 不定詞において節構造が確立され始めたことにより、もともと構成素否定として機能していた否定辞が、文否定 (sentential negation) を表す NegP の要素として再分析されたと主張する。具体的には、(27) における否定辞が CP と TP の間にある NegP の指定部を占める要素となり、(28a) の構造を持つようになったと仮定する。また、to 不定詞が節構造を持つようになったことにより、定形節の否定文との類推により、NegP が TP と vP の間にも投射されるようになったと考えるのは自然であろう。この時期に to が T と C いずれの位置も占めることができたとなると、TP の下位に NegP が投射される場合の to 不定詞の構造は (28b, c) の 2 通りとなる。(従来からの (27) の構造も存続していたが、ここでは省略する。)

(28) LME

- a. [_{CP} C [_{NegP} not [_{Neg'} Neg [_{TP} PRO [_{T'} to [_{vP} t_{PRO} [_{v'} V [_{VP} t_V ...]]]]]]]]
- b. [_{CP} C [_{TP} PRO [_{T'} to [_{NegP} not [_{Neg'} Neg [_{vP} t_{PRO} [_{v'} V [_{VP} t_V ...]]]]]]]]
- c. [_{CP} to [_{TP} PRO [_{T'} T [_{NegP} not [_{Neg'} Neg [_{vP} t_{PRO} [_{v'} V [_{VP} t_V ...]]]]]]]]

(28a)の構造ではtoがTの位置を占めており、動詞はvの位置までしか移動しないので、not-to-V語順が派生される。(28b)の構造においても同様に、動詞はvの位置に留まることになり、to-not-V語順が派生される。これに対して、toがCの位置を占めている(28c)の構造では、Tの位置が空いているので、動詞がnotを越えて移動することが可能となり、to-V-not語順が派生される。このように、後期中英語においてto不定詞が機能範疇TとCを持つようになり、toがTとCいずれの位置も占めることができたことと仮定することにより、否定辞を伴うto不定詞の3つの語順パターンを説明することができる。⁹

以上の分析が正しければ、後期中英語において、典型的には定形節で観察されるV-to-T移動がto不定詞にも存在していたことになる。これを支持する証拠として、to-V-not語順において代名詞目的語がnotに先行する(29)のような例が挙げられる。

- (29) a. if he have taken grace, to use *it* nocht als hym aght, ne to
 if he have taken grace to use it not as him ought nor to
 kepe *it* nocht;
 keep it not (CMROLLEP, 99.569 / M24)
- b. I pray you to teach *me* not how to answer or confess,
 (THOWARD2-E2-P1, 1, 89.173 / E2)

Holmberg (1986)に始まる一連の研究において、スカンジナビア言語に目的語転移 (Object Shift) と呼ばれる、目的語が副詞や否定辞を越えて左方移動する現象があり、本動詞がvP/VPの外部に移動する場合にのみ、それが許されることが報告されている。(30)はスウェーデン語の疑問文の例であるが、(30a)では本動詞がvP/VPの外部に移動しているため目的語転移が可能であるが、(30b)は助動詞を含む文であり、本動詞がvP/VPの外部に移動しないので目的語転移は不可能である。

- (30) a. Varför läste studenterna *den* inte?
 why read students-the it not
 'Why didn't the students read it?'
- b. *Varför har studenterna *den* inte läst?
 why have students-the it not read
 'why haven't the students read it?' (Thráinsson (2001: 152))

以下に見られるように、同様の現象が後期中英語と初期近代英語において観察されており、本動詞がvP/VPの外部に移動する場合にのみ代名詞目的語の転移が可能であることが、いくつかの文献で論じられている (Roberts (1995), Wurff (1997), Miyashita (2013))。

- (31) a. þerfre I do *it* nou3t
 therefore I do it not (Cloud of Unknowing 125.20 / Wurff (1997: 488))
- b. if you knew *them* not (1580, John Lyly / Roberts (1995: 274))

ここで(29)に戻ると、to不定詞において代名詞目的語が動詞とnotの間に現れており、定形節における目的語転移と同様の語順を示している。したがって、後期中英語におけるto不定詞、特にto-V-not語順ではV-to-T移動が適用されており、それによって目的語転移が可能になると分析される。¹⁰

最後に、否定辞を伴うto不定詞の近代英語以降の発達について考察する。4.2.1節で見たように、to-V-not語順は16世紀に消失したが、これには2つの要因が関与していると思われる。第一に、定形節におけるV-to-T移動の衰退が挙げられる。Roberts (2007)によれば、定形節においてV-to-T移動は16世紀に衰退し、17世紀中に一部例外を除き消失した。これがto不定詞にも影響を与え、V-to-T移動の存在を前提とするto-V-not語順の消失の引き金となったと考えられる。第二に、補文標識forの発達が挙げられる。Fischer, et al. (2000)は、以下に示されるように、補文標識forは主節述語の受益者項を標示する前置詞forから再分析されたものであり、その再分析が16世紀に起こったと主張している。この変化により、to不定詞においてforがCの位置に併合される要素として確立されたため、toの併合位置がCではなくTに固定されるようになったと考えられる。

(32) a. ... [PP for DP] [CP [TP PRO to vP]]

→ b. ... [CP [C for] [TP DP to vP]]

(cf. Fischer, et al. (2000: 217))

このように、to-V-not語順が成立するために必要な、V-to-T移動、およびtoがCの位置を占めるという選択肢に関する基盤が16世紀に失われ、この語順は消失した。その結果、(28a, b)の構造のみが存続し、not-to-V語順とto-not-V語順が現代まで生き残ったのである。¹¹

(33) ModE~

a. [CP C [NegP not [Neg' Neg [TP PRO [T' to [vP t_{PRO} [v' V [VP t_V ...]]]]]]]]]

b. [CP C [TP PRO [T' to [NegP not [Neg' Neg [vP t_{PRO} [v' V [VP t_V ...]]]]]]]]]

5. 結語

本論文では、不定詞形態素の分布と役割に注目し、不定詞標識toの素性変化とto不定詞の構造変化の観点から、英語史におけるコントロール不定詞の発達について考察した。古英語におけるto不定詞は前置詞としてのtoを主要部とするPPであったが、不定詞形態素の衰退により、後期中英語にto不定詞に機能範疇TとCが導入され、PRO主語が認可されるようになった。その後16世紀に不定詞形態素が消失した結果、to不定詞は現代英語と同じ節構造を確立した。そして、後期中英語にTとCが導入されたことを支持する証拠として、分離不定詞、代不定詞、wh句を伴うto不定詞が出現したことを論じた。また、後期中英語においてtoがTとCいずれの位置も占めることができたとする新たな分析を提案することにより、否定辞を伴うto不定詞の歴史的変遷が説明されると主張した。

注

* 本論文は、科学研究費補助金（基盤研究(C) 課題番号26370561）の研究成果の一部である。

1. (2)ではコントロール不定詞の目的語がbe関係節の先行詞に対応しているので、コントロール不定詞の内部から空演算子が移動していると分析される(Kemenade (1987))。一般に付加詞内部からの移動は不可能であるので、このような例は古英語においてコントロール不定詞が動詞の補部として用いられていたことを支持する。
2. 最近の極小主義理論においては、語彙項目は範疇素性を持たないと仮定されているため、どのような形式素性を持つのが重要であるが、ここでは説明の便宜上、範疇という概念を用いてコントロール不定詞の構造変化を記述することとする。
3. 初期中英語には使役動詞や命令・許可を表す動詞が語彙的主語を伴うto不定詞を取るようになったが(Fischer, et al. (2000), Los (2005))、その場合のtoの素性とto不定詞の構造については、Tanaka (2007)を参照のこと。
4. 後期中英語には思考・発言動詞が例外的格標示構文を取るようになったが(Fischer, et al. (2000), Los (2005))、初期中英語から後期中英語にかけてのto不定詞の変化の詳細については、Tanaka (2007)を参照のこと。
5. 本節で扱われている構文のうち、分離不定詞のみがコントロール不定詞だけでなく例外的格標示構文においても見られるが、例外的格標示構文におけるTが目的格素性を持たないならば、この事実は当然であると言える。注4、およびTanaka (2007)を参照のこと。
6. PPCME2, PCCEMEの時代区分は、M1 (1150-1250), M2 (1250-1350), M3 (1350-1420), M4 (1420-1500), E1 (1500-1569), E2 (1570-1639), E3 (1640-1710)である。
7. Visser (1966)は13世紀における原形不定詞を用いた間接疑問文の例を挙げている。同様に、PPCME2, PCCEMEを用いた調査により、原形不定詞を用いた自由関係節の例が初期中英語に見られることが分かった。このような例は稀であり、コロケーションが限られているようであるが、この事実に関する説明は今後の課題とする。
8. YCOEの時代区分は、O1 (-850), O2 (850-950), O3 (950-1050), O4 (1050-1150)であるが、O1とO2を初期古英語(EOE)、O3とO4を後期古英語(LOE)にまとめることとする。
9. (25)の調査結果におけるto-V-not語順30例のうち、4例がbeを含むものであった。助動詞のhaveおよび助動詞と本動詞のbeは、現代英語においてtoとnotの間に現れることが知られているが(Pollock (1989)), Iatridou (1990)はそのような例におけるhaveやbeは移動しておらず、notが後続する述部を修飾する構成素否定の機能を果たしていると主張している。
 - (i) To have not played football for many years is a disadvantage in a major game.
(Iatridou (1990: 574))
 したがって、当該の4例は(28c)の構造から動詞移動により派生されるのか、構成素否定を表すnotを伴うのかという点で、構造的に2通りの分析が可能である。
10. (25)の調査結果におけるto-V-not語順30例のうち、4例が代名詞目的語を含んでいるが、すべての例において代名詞目的語がnotに先行している。したがって、用例数は少ないものの、V-to-T移動が適用されるto不定詞における代名詞目的語の転移は義務的であると考えられる。後期中英語と初期近代英語の定形節における代名詞目的語の転移の義務性については、Roberts (1995), Miyashita (2013)を参照のこと。
11. (25)の調査結果においてはto不定詞の種類を区別していないが、例外的格標示構文の例は非常に少数であり、ほとんどがコントロール不定詞の例であるので、全体の議論に大きな影響はない。例外的格標示構文の範疇がTPであるとする標準的な仮定に従えば、toがTの位置を占めるnot-to-V語順とto-not-V語順は許されるが((22b)参照)、toがCの位置を占めるto-V-not語順は許されないと予測される。しかし、(25)におけるto-V-not語順のうち2例が例外的格標示構文であるという問題がある。これらはいずれも以下のようなbidの補部の例であり、コーパスのタグ付けでは例外的格標示構文であるとされているが、

Los (2005) が主張するように、目的語コントロール不定詞である可能性もある。

- (i) Crist bad þese men to publische not þis myracle,
 Christ bade these men to publish not this miracle (CMWYCSE, 268.745/M3)

参考文献

- Allen, Cynthia (1995) *Case Marking and Reanalysis: Grammatical Relations from Old to Early Modern English*, Clarendon Press, Oxford.
- Baker, Mark, Kyle Johnson, and Ian Roberts (1989) "Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 219-251.
- Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freiden, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, MIT Press, Cambridge, MA., 133-166.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) "The Theory of Principles and Parameters," *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research*, ed. by Joachim Jakobs, Arnim von Stechow, Wolfgang Sternefeld, and Theo Venneman, Walter de Gruyter, Berlin, 506-569.
- Emoto, Hiroaki (2007) "The Theory of Ellipsis in a Single-Cycle System," *English Linguistics* 24, 319-340.
- Fischer, Olga (1992) "Syntax," *The Cambridge History of the English Language: Vol. II (1066-1476)*, ed. by Norman Blake, Cambridge University Press, Cambridge, 207-408.
- Fischer, Olga, Ans van Kemenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff (2000) *The Syntax of Early English*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Gelderen, Elly van (1993) *The Rise of Functional Categories*, John Benjamins, Amsterdam.
- Guasti, Maria (1990) "The 'Faire-Par' Construction in Romance and in Germanic," *WCCFL* 9, 205-218.
- Han, Chung-hye (2000) "The Evolution of Do-Support in English Imperatives," *Diachronic Syntax: Models and Mechanisms*, ed. by Susan Pintzuk, George Tsoulas, and Anthony Warner, Oxford University Press, Oxford, 275-295.
- Holmberg, Anders (1986) *Word Order and Syntactic Features in the Scandinavian Languages and English*, Doctoral dissertation, University of Stockholm.
- Iatridou, Sabine (1990) "About Agr(P)," *Linguistic Inquiry* 21, 551-577.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Jarad, Najib (1997) *The Origin and Development of For-Infinitives*, Doctoral dissertation, University of Wales, Bangor.
- Lobeck, Anne (1990) "Functional Heads as Proper Governors," *NELS* 20, 348-362.
- Los, Bettelou (2005) *The Rise of the To-Infinitive*, Oxford University Press, Oxford.
- Martin, Roger (2001) "Null Case and the Distribution of PRO," *Linguistic Inquiry* 32, 141-166.
- McCawley, James (1983) "What's with With," *Language* 59, 271-287.
- Miyashita, Harumasa (2001) "Infinitival Verb Movement in Middle English and Early Modern English," *JELS* 18, 131-140.
- Miyashita, Harumasa (2013) *Historical Change in the Formal Licensing Conditions of Personal Pronominal Objects in English: A View from Intra-syntactically Driven Language Change*, Doctoral dissertation, University of Tokyo.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb Movement, Universal Grammar, and the Structure of IP," *Linguistic Inquiry*

- 20, 365-424.
- Roberts, Ian (1995) "Object Movement and Verb Movement in Early Modern English," *Studies in Comparative Germanic Syntax*, ed. by Hubert Haider, Susan Olsen, and Sten Vikner, Kluwer, Dordrecht, 269-284.
- Roberts, Ian (2007) *Diachronic Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Tanaka, Tomoyuki (2007) "The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives," *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-67.
- 田中智之 (2013) 「不定詞標識の(脱)文法化について」中野弘三・田中智之(編)『言語変化—動機とメカニズム—』開拓社, 東京, 159-174.
- Thráinsson, Höskuldur (2001) "Object Shift and Scrambling," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*, ed. by Mark Baltin and Chirs Collins, Blackwell, Oxford, 148-202.
- Visser, Frederikus (1963-73) *An Historical Syntax of the English Language* (4 vols), E.J. Brill, Leiden.
- Wurff, Wim van der (1997) "Deriving Object-Verb Order in Late Middle English," *Journal of Linguistics* 33, 485-509.

コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini, and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (1994) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, First Edition (PPCME1), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (2000) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, Second Edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk, and Frank Beths (2003) *The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose* (YCOE), University of York, Heslington.

キーワード：コントロール不定詞、機能範疇、不定詞形態素、不定詞標識、PRO

Abstract

On the Development of Control Infinitives in the History of English

Tomoyuki Tanaka

This paper aims to account for the development of control infinitives in the history of English, by investigating the changes in the feature specification of the infinitive marker *to* and the structure of *to*-infinitives. Paying special attention to the distribution and role of the infinitival morpheme, it is shown that control infinitives in Old English were categories of PP headed by *to* as a preposition which assigned dative Case to the following infinitive; in Late Middle English, the functional categories T and C were introduced in control infinitives, which led to the emergence of PRO as an infinitival subject. Then, the rise of five new constructions involving control infinitives is discussed as supporting evidence for the introduction of these functional categories in Late Middle English. Finally, it is argued that the historical change of negative infinitives is neatly accounted for by assuming that *to* could be merged either in T or C in Late Middle English, but its position was fixed to T in the sixteenth century due to the development of the complementizer *for*, as well as the decline of V-to-T movement in finite clauses.

Keywords: control infinitive, functional category, infinitival morpheme, infinitive marker, PRO